

# ベラルーシ留学報告

医学部5年

141079

千葉菜々絵

## 1. 概要

平成30年2月14日から3月23日までの5週間、私は同学年の守屋伶香フローラさんと共にベラルーシ共和国にあるベラルーシ医科大学・ゴメリ医科大学にて研修を行う機会をいただきました。研修内容としては、ベラルーシ医科大学とゴメリ医科大学とで異なりますが、基本的には平日に様々な講座や医療施設を見学したり、私の興味のある授業に参加させて頂いたりしました。さらに訪問した先々で質問や議論をしました。私は自分の興味があった医学教育と軍事医学を調べることを主眼に行きました。加えて放射線災害があった国の現状を知る、福島現状をベラルーシに伝えるという目的で研修に行きました。

## 2. 日程

平成30年2月14日～3月23日の5週間

## 3. 派遣先

ベラルーシ医科大学：2月14～3月4日までの2週間

ゴメリ医科大学：3月4日～3月21日までの3週間

## 4. 宿泊先

ベラルーシ医科大学・ゴメリ医科大学：学生寮

最終日：ミンスクにてユビレイニーホテルに宿泊

## 5. 派遣者

派遣時 医学部4年 141079 千葉菜々絵

医学部4年 141121 守屋伶香フローラ

## 6. ベラルーシ共和国について

ベラルーシはロシア、ウクライナ、ポーランド、リトアニア、ラトビアの5カ国に囲まれた東ヨーロッパの内陸国で、海はありません。国土面積は約21万km<sup>2</sup>で、日本の約半分となっています。人口は約950万人、首都はミンスクです。公用語はロシア語とベラルーシ語の二つで、住んでいる民族としてはベラルーシ人が83.7%、ロシア人が8.3%、その他ポーランド人、ウクライナ人などがいます。宗教はロシア正教が84%、カトリックが7%、その他が3%、無宗教が6%です。ベラルーシは6つの行政区(州)に別れており、ミンスク、ヴィテプスク、ブレスト、グロドノ、モギリョフ、ゴメリとなっています。日本との時差は-6時間です。通過はベラルーシルーブル(BYR)、電圧は220Vです。祝日は、1月1日の新年と、1月7日の正教会のクリスマス、3月8日の国際婦人デー、4月21日のラドニツァ、5月1日のメーデー、5月9日の戦勝記念日、7月3日の独立記念日、11月7日の10月革命記念日、12月25日のカトリッククリスマスなどがあります。<sup>\*1</sup>

国の元首はルカシェンコ大統領で、現在任期5年目です。ヨーロッパ最後の独裁国と呼ばれている通り、あらゆる権力と富はルカシェンコ大統領に集中しています。ですから国民は貧しい人が多く、街を歩いているとお金を乞う人を見かけることがあります。しかしながら首都ミンスクには大きく美しいショッピングモールやホテル、スポーツ施設などがあり、街は綺麗で外国からベラルーシを訪れた者には初見で国全体にはびこる貧しさを体感することは難しいです。

ベラルーシは1986年4月26日にチェルノブイリ原子力発電所事故の被害を受けた国です。チェルノブイリ原発自体はウクライナにありますが、事故当時の風向きによってベラルーシにも放射線が舞い降り、多大な影響が出ました。チェルノブイリ原発から一番近い地域はゴメリ市です。

ベラルーシは海がないことから海産物よりも畜産物が主流で、乳製品や肉製品が美味しいです。主食は主にじゃがいもです。ベラルーシの伝統的な料理ドラニキは、すりおろしたじゃがいも、小麦粉、卵などを使って薄く平らに焼いた食べ物で、よくサワークリームと一緒に食べます。ベラルーシではサワークリームをスメタナといいます。

## 7. 留学の動機

私の留学の動機は三つにまとめられます。日本を客観的に見ることで、ベラルーシの医学教育と軍事医学を調べること、放射線災害を受けた国という側面を持つベラルーシの現状を知るとともに福島現状を伝えることです。

まず一つ目に関してです。私は日本生まれ日本育ち、日本という国のなかでしか生きてこなかった人間ですが、日本が一番住み良い国なのだと考えなしに信じていました。なぜならマスメディアでも日本の良さを取りあげた内容のものをよく見ましたし、海外旅行に行った人から日本が良いという話を聞いたことが何度もあったからです。しかしそれらはあくまで私以外の人間の考えであり、私自身の考えではありません。私は自分の頭で考えた結論が欲しい、と思いました。客観的な目線で日本を振り返るためには、比較できる経験が必要でした。一度日本の外に出てみないことには日本の姿を捉えることはできません。建物の内部から外観を見ることができないように。従って、私がこの医科大学の留学プログラムに応募した際は中国、アメリカ、ベラルーシの全ての国に応募しました。選ばれた国で精一杯研修し、その国の状態を肌に触れて感じることで、この一つ目の目的が果たされると期待しました。

二つ目についてです。日本の医学教育は現在変遷の中にあり、カリキュラムの変更や海外医学部で学んだ日本人学生が日本の病院で働く場合の対応への検討などがなされています。ベラルーシにある医科大学ではベラルーシ国外からの学生を受け入れ、多種多様な出身国の学生が医師になるための勉強をしています。対して日本では基本的に日本人が日本国内で働くことを想定した医学教育がなされています。この相違点に着目し医学教育に興味を持ちました。次に軍事医学については、日本には軍医になるための学校が防衛医科大学以外にはなく軍医が身近なものではないのに対して、ベラルーシで訪問したベラルーシ医科大学・ゴメリ医科大学では軍事医学がカリキュラムの中に入っており、軍医が身近なものである違いに興味を持ちました。

最後に、福島と同じく放射線災害を被った国の現状を知る、福島現状を伝えるという目的についてです。私は、30年前に放射線災害があった国であるベラルーシの現状を知ること、7年前に災害があった福島未来を予想する手がかりが得られるのではないかと期待しました。未だ日本国内でも福島のことを誤解し放射線を過剰に心配している人がたくさんいる中、世界に目を向ければ福島現状を知らない人がさらに大勢いると考えるのはもっともなことだと思います。直接人に会ってきちんと説明するというのは地道な作戦ではありますが、効果は高いものです。説明を受けた人からその周囲の関係性のある人たちへ情報が伝達されることもあるかもしれませんし、この場合は知り合いからの説明ということで印象に残りやすいでしょう。福島県立医科大学の代表として研修に行かせて頂けるわけですから、これは最低限の私の務めだと思います。

以上3つが私の留学の動機です。

## 8. ベラルーシの医学教育に関して

ベラルーシには4つの医科大学があります。

- Belarusian State Medical University(in Minsk)
- Vitebsk State Medical University(in Vitebsk)
- Grodno State Medical University(in Grodno)
- Gomel State Medical University(in Gomel)

ベラルーシ医科大学は首都のミンスクにあります。ヴィテプスク医科大学、グロドノ医科大学、ゴメリ医科大学はその名の通りそれぞれヴィテプスク、グロドノ、ゴメリにあります。全ての学部で外国人学生が入るための学部や措置が取られており、医学を学ぶことができるようになっています。以下では General Medicine の学部について概要をお話しします。最初の3年間は解剖、組織、生物、化学、物理、ラテン語や他の外国語、哲学などの基礎科学や教養系の学問を学びます。残りの3年間では病院やポリクリニックにて実習を行い、内科疾患や外科疾患、産科婦人科、感染性疾患、腫瘍学、神経学、

小児科などで学びます。夏になるとPractical training というものがあり、4年生でnursing、5年生でoutpatient practice、6年生でinpatient practice を学びます。

#### 9. ベラルーシ医科大学について Belarusian State Medical Univerity

ベラルーシ医科大学は、BSMUと訳され通称「ベゲムー」と呼ばれています。学部は全部で6つあり、総合内科(General Medicine)、小児科(Pediatrics)、歯科 (Dentistry)、予防医学(Preventive Medicine)、薬学(Pharmacy)、軍事医学(Military Medicine)です。総合内科、小児科、予防医学、軍事医学では教育期間が6年間で、歯科と薬学は5年間です。もらえる資格は総合内科、小児科、予防医学、軍事医学は医師、歯科は歯科医、薬学は薬剤師の免許ということです。学生から聞いた話によると、医師になるための学部よりも歯科に入る方が難しく、社会的な地位も歯科や薬学の方が上なんだそうです。外国からベラルーシ医科大学で学びたい学生はどの学部にも入ることができるそうです。ベラルーシ国外からの市民のために、ロシア語を学ぶ必要がある入学希望者や入学試験の準備をしておきたい入学希望者 Preparatory Departments of the Faculties for foreign students でロシア語や生物、化学、数学、物理などを学ぶことができます。外国からやってきた学生には寮が与えられます。私たちが暮らしていた量と同じ者でした。

Faculty	Speciality	Qualification	Course of study
General Medicine	General Medicine	Physician	6
Pediatrics	Pediatrics	Physician	6
Dentistry	Stomatology	Dental Physician	5
Preventive Medicine	General Medicine and Preventive Care	Physician	6
Pharmacy	Pharmacy	Pharmacist	5
Military Medicine	Gemiral Medicine(Military Medicine)	Physician	6

#### 10. ゴメリ医科大学について Gomel State Medical University

ゴメリ医科大学はGSMUと略され、通称「ゴンゲムー」と呼ばれています。学部は全部で4つあり、そのうちの一つである Pre-university training はゴメリ医科大学への入学希望者が入るところで、先ほどのBSMUと同様にロシア語やその他の科目を学ぶことができ、修了すると証明書をもたらうことができます。そのほかの3学部は総合内科(General Medicine)、診断医学(Diagnostic Medicine)、外国人学生のための総合内科(General Medicine for Overseas Students)で、ベラルーシ国外からの学生は基本的には三つ目の学部に入れられるということでした。この外国人学生が入る学部の学生としてはトルクメニスタン、インドが非常に多く、ほかにスリランカ、ナイジェリア、イラク、レバノン、ロシア、イエメン、ウクライナ、カザフスタン、シリア、アゼルバイジャン、パレスチナ、タジキスタン、イスラエル、イラン、ガーナ、ベラルーシ、イギリス、モルディブ、ネパール、アメリカ、フランス、モルドバなどでした。実際に公衆衛生の外国人クラスに参加させて頂いた時もインド出身の方を見かけることが多かったです。それぞれ自国の言語の他に英語、そしてロシア語も学ぶのでマルチリンガルが当たり前の世界でした。ゴメリでも外国人学生は寮が与えられます。

Faculty	Specialty	Qualification	Course of study
General Medicine	General Medicine	Physician	6
Diagnostic Medicine	Diagnostic	Physician	5
General Medicine for Overseas Students	General Medicine	Physician	6
Pre-university Training	-	-	-

## 11. 研修内容

• Belarusian State Medical University(BSMU)

- 1) Department of Nervous and Neurosurgical Diseases
- 2) Department of Normal Physiology
- 3) Department of Public Health and Healthcare
- 4) Department of Oncology
- 5) Department of Cardiology and Internal Diseases
- 6) Department of Radiation
- 7) Military Medicine
- 8) MLSU にて日本語を学生に教える

私たちがベラルーシ医科大学にて訪れた講座や参加した授業、病院や機関は以上のようになっています。

### 1) Department of Nervous and Neurosurgical Diseases

まず講座に行き、神経学のレクチャーを受ける学生たちから日本の医学教育やシステムについての質問を受けました。そのあと病院内をまわり、手術機械の説明や移植のやり方、X線造影手術を見せていただきました。機器類は多くがEU製で、CTやMRIは日本製があると言っていました。

### 2) Department of Normal Physiology

こちらは生理学の講座です。日本製の機械に手作りしたものを付け足した機械を用いて、腕に巻いたカフで圧力を与える前と後の血液中の酸素化ヘモグロビンと還元ヘモグロビンの変化を計測するものを見せていただきました。計測の際には母指球を使います。その機械を用いて実際に長崎大学の学生が測ってもらっていました。その後、Physiologyの授業に参加させていただきました。学生たちはアンドリュー先生の質問にためらわず答えるので、日本の学生とは違う学習姿勢だなと思いました。

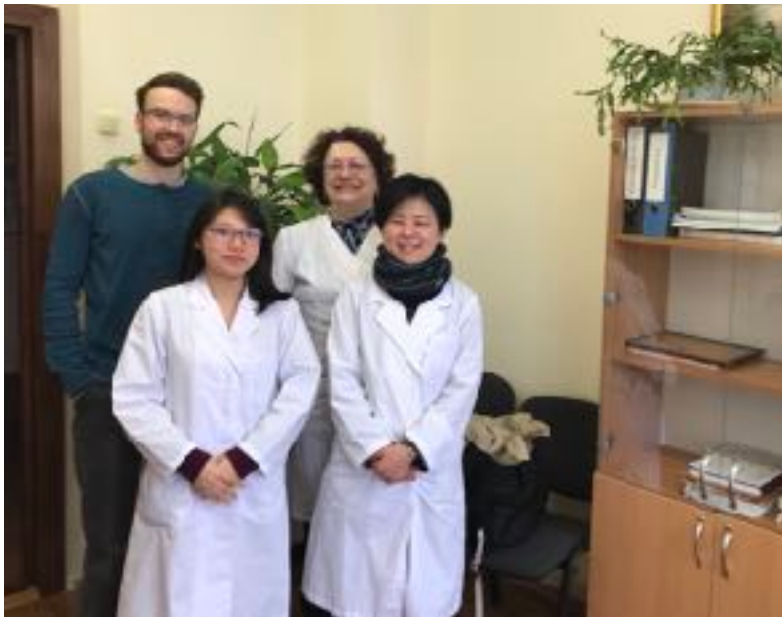
その後解剖学教室を見せてもらいました。死者から学ぶ、といった内容のギリシャ語が入口の上に掲げてありました。中に入ると一人の学生が肺を解剖していました。解剖台は4台くらいしかなかったように記憶しています。その後、表本質に入り、人以外の動物のホルマリン漬けや人の奇形、水頭症、コールまみれになった肺の標本などを見ました。

一番初めに入った部屋に戻って帰り支度などをしていると、ヘレナ先生から日本の医学教育とキャリアパスについて質問を受けました。ベラルーシでは学生結婚が多いです。ベラルーシでは医師の給与と地位が低く、学生からのリスペクトもあまり受けていないのが問題だとおっしゃっていました。給与が上がれば教師を敬う学生も増えるだろうとのことでした。

### 3) Department of Public Health and Healthcare

タチアナ・パブロビッチ先生は2017年度、福島県立医科大学にいらっしゃって公衆衛生の講義をしてくださった先生で、私と守屋さんはベラルーシに行く前から日本で知り合っていた先生でした。再び会えたので私たちはとても嬉しくなりました。まず講座で挨拶をしてから、学生たちが受けている授業を聞き、一緒にディスカッションをしました。内容は安楽死と中絶でした。私は日本の公衆衛生で教えている内容とは少し異なる印象を受けました。Public Healthの講座には数日間研修をさせていただ

たので、私たちが作ってきたプレゼンテーションを学生たちに向けて行いました。そのあと学生たち、タチアナ先生と一緒にディスカッションをしました。また、タチアナ先生からベラルーシのヘルスケアシステムについて講座で教わりました。これは守屋さんの興味のある分野だったのですが、私も聞けてよかったなと思いました。タチアナ先生は始終私たちに気配りしてくださり、優しく親切にしてくださいました。



タチアナ先生、私と守屋さん、英語に翻訳してくれた学生のマックスさんと一緒にとった写真

#### 4) Department of Oncology

腫瘍学講座です。講座を訪れた際、すでにInternational コースの学生がいて、皮膚にできる癌の勉強をしていました。一緒にレクチャーを受けてから、手術室の見学をさせていただきました。甲状腺摘出術で、Thyroidectomy です。手術室での医療スタッフの働きぶりや手術の方法を見るにやや清潔と非清潔の区別が曖昧なところがあり、少し不安になりました。術野を作る布は日本ではディスポーザブルですがこちらでは洗って再利用します。麻酔をかける医師がスマホを触った手でそのまま患者に麻酔をかけているのをみたときは、これはいいのだろうかと疑問になりました。しかしまだ日本の手術室にも入ったことがないので比較はできませんでした。

執刀医との会話で、日本の医療システムや医師の給料、芸者、猫カフェについて聞かれました。ミンスクのどこが好きか、などの質問もされました。ミンスクは都会で人が優しく、外国人を排除しない雰囲気が好きだと答えました。

別の日には乳がんの講座へ行きました。マンモグラフィーの部屋へ案内され、どのようにマンモグラフィーを行うか、乳がんがどのように発見されるのか、手術の際にがんが目印をつける方法などを教えていただきました。

#### 5) Department of Cardiology and Internal Diseases

まず Emergency の Cardiology を見せてもらいました。私たちが到着した頃には学生がたくさんおり、朝の回診のようなものをしていました。ナースステーションのようなところに集まり、急性心筋梗塞の心電図について説明を受けました。それから順に病室へ進んで行き、患者の病状を説明しながら Cardiology について勉強していました。一部屋に 40 人はいたので、後ろの方にいた学生は何も見えていないようでした。患者の心音なども聞かせていただきました。

別の日には違う病院の Cardiology に行き、心不全で浮腫を患う患者、ヘビースモーカーで狭心症になった患者、半身不随の患者などを診させていただきました。最後の患者の皮膚が人工的な緑色をしていたので、あれは何かと訪ねたところ、防腐剤のようなものでベラルーシではよく使われるものだったとのことでした。ヘビースモーカーの患者の説明を受けている間に、この国の一番の問題が喫煙率の高さとアルコールの摂取量の多さなのだと説明を受けました。

また別の日には別の病院の Cardiology の見学をしました。そこでは X線を当てながらカテーテルを腕の血管から心臓に入れ、心血管病変を治療するものでした。心電図を見たり、手術風景を見たりしました。

#### 6) Department of Radiation

ここでは放射線に関することやこの講座で行っている研究内容、チェルノブイリに関するプレゼンを聞きました。私たちが持参していた Radiation Detector を見せてそれについてお話をしたり、講座にあるいろんな放射線測定器を見せてもらいました。研究内容としては、1986年にチェルノブイリ事故が起きた年に妊娠した女性とその子供の健康状態を調査しているということでした。

#### 7) Military Medicine

ここでは学生が教わる内容の軍事医学のレクチャーを受けました。教室の一角には、軍服に身を包み中を携えた兵士たちがどのように負傷兵を助け出すのか、どのようにガスマスクを使うのかなどの絵が描かれた板が吊るしてありました。レクチャーの内容としては Disaster Medicine に関するもので、トリアージなどもありました。質疑応答の時間に Military Doctor の給料について質問したところ、医師になれば少なくとも 700\$/month は稼ぐとのこと、さらに他の病院で働いたり他の仕事を加えればもっと稼げるそうです。ベラルーシの一般的な医師の給料が 200\$/month であると言われていたのでこの差に驚きました。また、Military Doctor になるためにはほぼ完全に健康な男性(主に男性、時に女性もいるが働き口が少ないので女性は少ない)でなければ入れないそうです。例えば喘息などがあるとなれません。



Military Medicine の先生と私と守屋さん

#### 8) MLSUにて学生に日本語を教える

Minsk State Linguistic University という言語大学にて日本語教師をしていらっしゃる半田美穂先生のご厚意で、日本語を学ぶベラルーシの学生たちに日本語を教えてきました。半田先生は前・在ベラルーシ共和国日本国大使館専門調査員で、「ベラルーシを知るための 50 章」という本の執筆者の一人でもあります。簡単に自己紹介をした後少し日本語で会話をして、日本で撮った写真を学生たちに見せながら日本文化を紹介しました。



学生たちに日本語を教える私(左)と守屋さん(右)。後ろで見守っているのが半田先生(右)

• Gomel State medical University

- 1) Department of Military Medicine
- 2) Observing Regional Hospital
- 3) Department of Public Health
- 4) Department of Endocrine
- 5) Institution of Female Consultation
- 6) Visiting within 30 km from Chernobyl NPP
- 7) Children Polyclinic
- 8) Republican Research Centre for Radiation Medicine and Human Ecology

私たちがゴメリ医科大学にて訪れた講座や参加した授業、病院や機関は以上のようになっています。

1) Department of Military Medicine

ゴメリ医科大学での医学教育(軍事医学に関して)と大学卒業後の進路、軍事医学の変遷の歴史、チェルノブイリ事故が起きた時の Military Doctor の活躍の仕方、ベラルーシの医療制度などについてお話を伺いました。そのあとシミュレーション機器が備え付けてある建物に移動し、部屋を案内していただきました。指サックをはめた状態で膣に手を入れ、胎児の頭部の状態を観測することで、その指の動きが正しいか田舎を指導官が指摘できる機械などがあり、これは日本製ということでした。他にも手術シミュレーションがありました。

別の日には、Lyceum schools for Ministry of Emergency Situation という施設へ行きました。ここでは18歳以下の子供たちがそこに暮らしながら非常事態にどう動けばいいのかを学びます。広大な敷地にはいまは使われていないヘリコプターや飛行機が置かれていました。負傷したマネキンを用いて治療方法の練習や、窒息しかけているマネキンでハイムリッヒ法の練習、森の中での対処法、薄い氷の張った水に落ちた人の助け方、火事が起きた際の真っ暗な家からの脱出方法、火事の消し方、交通事故が起きた際の電話のかけ方、その他あらゆる危険への対処法が子供たちに教えられます。幼い子供にはリアルな怪我したマネキンでは怖いので、大きなテディベアを用いたり、アニメを見たりするところから始まります。

また別の日には Military Medicine の外国人クラスに参加しました。授業内容は Konstantin 先生による Military Loss と Treatment Evacuation Method についてでした。





Military Doctor の Oleg 先生(左)とLyceum の前で撮った写真(右)。



Lyceum にてハイムリッヒ法を教わる私

## 2) Observing Regional Hospital

ここはベラルーシでできた私のお友達がアルバイトをしている病院で、もし興味があるなら見せてあげよ、という提案に乗って見学させていただきました。彼は ER の講座で働いているので、そこを重点的に見させていただきました。主にバイタルを見るための機器類の説明を受けましたが、そこで使われている医療機器は中国製、ドイツ製、ベラルーシ製のものだそうです。患者のベットには、患者の ID、名前、病気などが記載された紙が貼ってあり、迷うことなく働くことができるそうです。患者の部屋の棚には医薬品が入っていて、必要な時にいつでも取れるようにしてありました。新生児を治療するための機械も見ました。それは日本では NICU にあるものでした。一番驚いたのは床ずれの予防に Antiseptic を使うとのことで、日本での床ずれ予防策について自分が知っていることが二時間おきの体位変換のみだったので驚きました。この講座には長くて 70 日間入院している患者がいるそうです。



Department of ER の前で撮った写真

### 3) Department of Public Health

この講座には私たちのお世話を担当して下さった Anastasiya Sachkouskaya 先生と一度福島医大にお越しになったことのある教授のタマラ・シャルシャコワ先生がいらっしゃいます。ここではアナスタシア先生の授業に外国人学生と参加したり、日本で私たちが用意してきたプレゼンをしたりしました。



プレゼン終了後の記念撮影

別の日には、アリス先生によるベラルーシの Demography(統計学)の講義を受けました。印象深かったのはベラルーシの男性は女性よりも平均寿命が10年以上も短いという事実でした。この違いについてはいろいろな国の研究者も疑問視しており、研究がなされているとのことでした。

### 4) Department of Endocrine

この病院には甲状腺内分泌講座があり、チェルノブイリ事故後の甲状腺患者のケアをしています。この病院の所長にお会いし、お話を聞くことができました。自身の甲状腺を心配し、甲状腺検査や診察をするためにこういった機関にくる人のことをディスペンサリーといいます。WHO と IAEA により、

ベラルーシにおける甲状腺癌は放射線関連癌であると認められています。話を聞いた後、病院内の見学をしました。患者は窓口やオンラインで一ヶ月先まで予約を行うことができ、来院したらまず窓口に行きます。そこで患者は細長い紙をもらい、順番を待ちます。

#### 5) Institution of Female Consultation

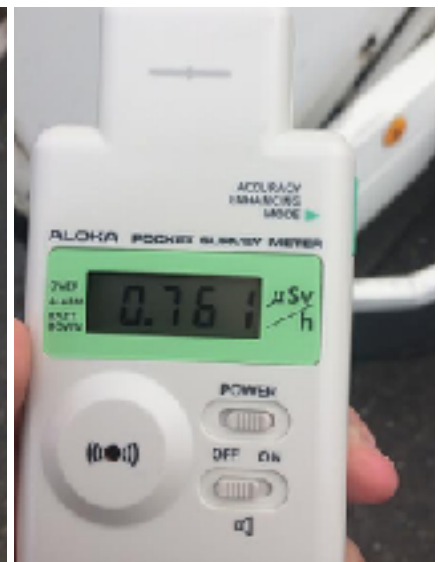
ここでは主に人した女性を対象として妊娠機のケアや母体の中で胎児がどのような状態にあるかを模型を使って教えたり絵、エコー検査を行ったり、子育ての仕方を教えたり、中絶を考える女性にはよく説明して考えをまとめる手助けをしたりします。この機関の方にお話を伺うことができました。福島県では放射線を恐る女性や妊婦がいることから、これに関連した質問をしてみたところ、今げん在放射線の胎児への影響を恐る妊婦はいないし、事故と放射線は過去のものとなっているとのことでした。そのあと病院内を回りました。超音波やトラウベ、胎児の大きさを説明するための週数ごとの胎児の模型や胸にしこりがないかを調べる練習用の胸の模型などがありました。

#### 6) Visiting within 30 km from Chernobyl NPP

ホイニキ地区を訪れました。ここはチェルノブイリ原発に近いところです。ホイニキ地区にある学校と病院を見学しました。また、チェルノブイリ原発から 30km 圏内も訪れました。ここでは自然保護区があり、バイソン飼育場や養蜂場がありました。養蜂場で作られたはちみつは放射線量測定を行い、基準値以下であれば出荷、基準値以上であれば破棄されるとのことでした。バイソン飼育場では空間線量はやや高めでしたが、これは飛行機に乗る時と同じくらいでした。ホイニキ地区の学校では、生徒たちが食べ物の放射線管理を実演してくれました。病院内にはホールボディカウンターがありました。



バイソン飼育場前での空間線量(上)と  
比較のため Minsk 空港から Frankfurt 空港への飛行機内で撮った空間線量(下)





養蜂場でできた蜂蜜の試食をする守屋さん(左)とバイソン飼育場のバイソン(右)



ホイニキ地区の学校(左)と放射線測定を実演している学生たち(右)



病院内にあったホールボディカウンターで測定してもらっている私

## 7) Children Polyclinic

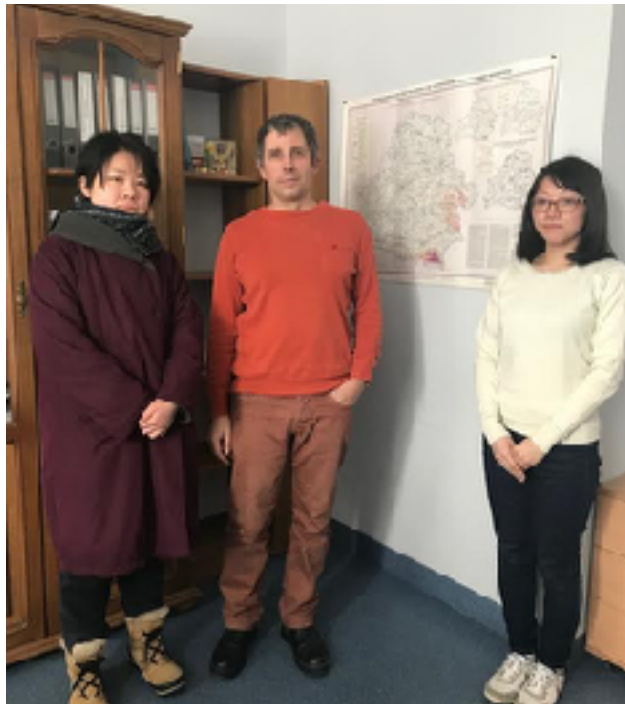
ここは小児科病院でした。私たちは病院長とお話する機会をいただきました。この病院では 800～1000 人ほどの子供を担当してみているそうです。子供の病状に合わせて小児科医がその子供が行くべき科を選択し紹介するため、専門科の医師は少なくても済むそうです。説明が終わった後、院内の見学しました。院内にはまず出入り口付近に受付があり、そこで患者は予約をしたり予約をしたり受付をしたりします。院内の壁には掲示板が貼ってあり、子供の病気のリスクファクターなどが書いてあり、親に適切な情報を与えるのに活用されているとのことでした。簡単な外科手術をする部屋、少し複雑な外科手術をする部屋、温熱療法を行う部屋などがありました。手のひらで子供の天使を包み込むオブジェなどもありました。



子供を守る手のオブジェ。子供は皆天使だからとのことでした。

## 8) Republican Research Centre for Radiation Medicine and Human Ecology

この施設ではチェルノブイリ事故後の被災者たちを分類し、それに従って健康管理の追跡を行なっています。ここで働く Iliya 先生から、まず海外から説明を求めてこの施設にやってきた人たちに説明するためのスライド発表を聞かせてくださいました。Iliya 先生の発表はグラフや統計を用いた具体的なものだったのでとても分かり易かったです。結論からいうと先生は放射線による影響は甲状腺癌にのみ認められると考えており、ここに注目すべきだとおっしゃいました。



Iliya 先生と一緒に撮りました。

## 12. 学生寮について



昼間のミンスクの学生寮(右)と夜の学生寮(左)



ミンスクのキッチン(右)とベッドルーム(左)

ミンスクでの学生寮しか写真をとっていなかったのがゴメリの学生寮をお見せすることができないのですが、例年の学生と同じような部屋でした。ミンスクの学生寮は比較的新しいようで、清潔で広く、キッチン、洗面所、シャワールーム、トイレがついていました。ただしトイレの鍵が壊れていて、いつもトイレに入るときはロックしてから使っていました。キッチンには冷蔵庫と電子レンジがありました。お皿やコップ、調理器具もありました。ベッドルームは二つあり、一つは上の写真のように4つのベッドが、もう一つの部屋には2つベッドがありました。私と守屋さん、最初の数日間は4つのベッドルームがある部屋を使っていましたが、その後それぞれ分かれてベッドルームを使っていました。というのも、最初の数日間は長崎大学の留学プログラムでベラルーシにやってきていた二人の学生と共同生活をしていたからです。寮にはタオルがたくさん準備されており、定期的に交換してくれました。寮の地下一階には洗濯室もあり、週に1回ほどのペースで私たちも洗濯をしました。部屋にアイロンもありました。テレビはつけるとブーンという鈍い電子音が響いて画質も日本のものに比べてよくなく、全てロシア語だったので初日以外に観ることはありませんでした。玄関の前に全身鏡がありました。

ゴメリでの学生寮はミンスクに比べると古く、所々壊れたり穴が空いていたり、扉が閉まらなかったりキッチンがついていなかったりしました。洗濯室はありましたがアイロンがなく、同じ寮に住む学生に借りていました。広さは問題なく、二つのベッドがある寝室とリビング、冷蔵庫もう一つの部屋があるといった感じでした。私たちがこの部屋に入る日に電子レンジを準備してくれました。食器はなかったので、お皿2枚とコップ2つを寮から借り、まな板や包丁、鍋は学生から借りました。タオルは一人1枚だけでしたが、自分たちで持参したタオルがあったのでこれは問題なかったです。ただ、鏡に関しては、小さいものがシャワールームにあるだけだったので全身鏡はありませんでした。

### 13. 食事

平日		
	ミンスク	ゴメリ
朝食	学生寮の食堂にて(無料)	自分で用意(自費)
昼食	学生寮の食堂にて(無料)	学生食堂or外食(自費)
夕食	自分で用意(自費)	自分で用意or外食 (自費)
週末・祝日		
	ミンスク	ゴメリ
朝食	自分で用意(自費)	自分で用意(自費)
昼食	自分で用意(自費)or外食	自分で用意(自費)or外食 (自費)
夕食	自分で用意(自費)or外食	自分で用意(自費)or外食 (自費)

食事に関して、ミンスクとゴメリでやや違いがありました。ミンスクでは平日の朝食と昼食は私と守屋さんが住んでいた寮の一階にある食堂で支給され、無料でした。また、外食などをすると多くの場合学生が払ってくれました。BSMUでは留学生の食事のためにお金が下りる制度らしく、多くの場合自分たちで払うことはありませんでした。対してゴメリでは基本的に全て自費でした。ゴメリの学生食堂(Canteen)は安くて美味しいです。ただ、GSMUの学生曰く安くて値段相応の味(=あまりオススメしない)らしく、大学の近くのいろんなレストランによく連れていってくれました。そちらは Canteen ほど安くはなかったものの普通に美味しかったです。

週末や祝日にはいろんなところへ連れていってくれます。ミンスクでは外出先でご飯を食べるときに



も私たちの文を払ってくれることが多かったです。ですからあまりお金は使いませんでした。ゴメリでは外出先の食事も基本的に自費でした。ミンスクの学生食堂にて出された食事

ベラルーシではお昼にスープを食べる習慣なので、お昼ご飯では必ずスープがついてきました。



お店で食べたドラニキと守屋さん





その他ミンスクの食堂で出た食事(上)



ゴメリのレストラン(バチキ)で食べたご飯(左)とGSMU の Canteen での食事(右)

#### 14. 学生との交流

ミンスクでもゴメリでも、学生はいろんなところに連れて行ってくれました。また、あるお休みの日には一緒にドラニキを作ったりもしました。出先でいろんな話をします。出身、自分の国のこと、趣味、政治や経済、将来について、家族について、ジェンダー、LGBT、女性蔑視の話、アニメ、お酒の話、給料の話、なんでもします。それらについて考えられるように訓練されて行きます。私はこの研修を通して、日本人である私がいかに何も考えずに生きていたのかということでした。自分の頭で考える必要性を認識することができました。



学生のマックスさんと守屋さん



学生とドラニキを作りました。



ゴメリの教会に行きました。



ゴメリにて。サーカスに行きました。いまでも連絡を取り合う仲です。



ゴメリの料理屋さんにて。

## 15. 研修を通しての感想

私たちが会ってお話をした人たちは皆非常に優しく寛大な方ばかりでした。私は日本人として日本人の考え方をすると強く思います。というのも、自分の言ったことが相手にどう影響を及ぼすか、相手の時間をとってしまっていないか、相手が忙しいときに今自分がこれをしてもいいのだろうかなどと考えを巡らせ、時によってはやりたいことや言いたいことを言わずにそのままやめてしまうと言ったことがしばしばあるからです。この日本式の「遠慮」という文化は、いい面も悪い面もあります。いい面としては、他人に迷惑をかけないし、他人に負の感情が伝わることはありません。悪い面としては、本音がわかりにくい、主張ができないため何を考えているのかわかりにくい、言えないことからくるストレスなどです。ベラルーシでは、いい意味で相手に与える影響を考え過ぎないと言った印象を受けました。意見があればはっきり言う、提案されたらとにかくやってみる、そういった面が耕されました。もちろん、相手を傷つけるようなこと、誹謗中傷などは言うてはいけませんし、ベラルーシの方もそのようなことは言いません。私たちは言わないことのいい部分もきちんと認識すべきです。

それから、自分と異なる意見が出た際にはそれに寛容だなという印象も受けました。全く別の考え方があってそれでいい、と言った雰囲気でした。ベラルーシではロシアやアルメニア、インドやスリランカといったいろんな国の人が住んでいます。ですから、相手の文化・国・意見をリスペクトすることが大切なのだと思いました。

## 16. これからベラルーシ留学を考えている学生に向けて

ベラルーシを知るための50章という本を一度読むことをお勧めします。また、実際に興味を持った際には気兼ねなく私や守屋さんにもコンタクトをとってください。

ベラルーシの人は優しく親切ですが、気を抜いてはいけません。ベラルーシから日本へ帰らなくてはいけない日に、私はタクシーの中で日本に帰りたくないと号泣していましたが、そのせいか20BYRもぼられてしまいました。おそらく、隙のあるカモだと認識されたに違いありません。どうぞお気をつけて、研修なさってください。

## 17. 参考文献

\*1 ベラルーシ共和国観光情報サイト「ベラルーシ共和国について」, <<http://tourismbelarus.net>>, 2018年3月アクセス

